

# 膨大な知の宝庫、辞書の世界を知らずにどうする！ いやしくも大人なら『ビッグ4』を

「辞書なんてどれも同じ」というのが、そもそも大きな誤解。どんな辞書にも、編纂者や執筆者、編集者の「想い」があり、限られた文字数で多くの情報を伝えるための悪戦苦闘がある。辞書博士でもある学者芸人、サンキュータツオさんに聞いてみた。

学者芸人

## サンキュータツオ

●1976年東京都生まれ。早稲田大学大学院博士後期課程終了。お笑いコンビ「米粒写経」として活躍するかたわら、一橋大学非常勤講師も務める。200冊を超える辞書を持つ辞書コレクター。著書に『学校では教えてくれない！ 国語辞典の遊び方』（角川学芸出版）など。

### 言葉の意味に「正しさ」はない

皆さん、おそらく大きく誤解されていることがあると思います。それは、「辞書なんてどれも同じ」「辞書は正しいことが書いてある」ということです。どれも同じであり、正しいということは、つまり、どの辞書を開いても、同じ項目は同じ記述に

なっているはずだという誤った先入観ですね。

たとえば【りんご】をどう説明しているのか。「寒地で栽培される落葉高木」という植物学的な定義で説明する辞書もあるでしょうし、いまの『三省堂国語辞典』（以下、『三国』）のように「手のひらに乗るくらい丸い果物」と、まず果物であることから説明する辞書もある。品種の説

明までする辞書もあるでしょう。

【りんご】の説明が、「赤くて丸い食べ物」としかなかったら、それは「トマト」にも当てはまります。だから味や品種、植物学的説明も必要になる。そこでトマトとの違いを書かなければなりません。

辞書の説明はシンプルです。ですが、それぞれ個性というか違いがあつて、「正しい説明」というものは

ない、というか、どれも正しく、どれも不十分といえば不十分なんです。それは周りの人に、「りんごを説明してください」と聞いてみれば、みんないろんな説明をして同じ答えが返ってこないのと同じなんです。

国語辞典は、当然ですが機械が作っているのではない。人が作っているんです。いくら客観的な記述を心がけようとしても記述の仕方が違うように、そこには編纂者・記述者の何かがあらわれるのです。

僕が集めている小型の国語辞典はだいたい多くても千八百ページくらいで、編集・製作予算も限られているのでしょから、一つの項目について説明できる文字数も限られています。すべての情報を入れるわけにはいきませんから、項目も取捨選択をしなければなりません。【りんご】を収録するのか、収録しないのか、

という検討から始められているのです。

国語辞典の編纂に携わっている先生方の仕事の多くは、「どの言葉を選択するかを選ぶ作業」です。そのためには辞書編纂の理念を掲げ、ルールを作る。手元の辞書を見てください。どの辞書にも冒頭に「はじめに」や「編集方針」を表明した序文があります。いわばその辞書の編集理念が記されているんです。ここを比較するだけでもおもしろいですよ。辞書によって編集方針が異なるので、載っている言葉と載っていない言葉の差はかなりあるんですよ。

たとえば、現代用語の扱い方は辞書の個性の一つでしょう。【ファミコン】つまり、ファミリーコンピュータは、僕ら世代（三十代後半から四十代）はもちろんわかります。しかし、いまの十代、二十代はわからない

いのではないのでしょうか。彼らがわかる家庭用ゲーム機器はプレスステ（プレイステーション）ぐらいからです。

【ファミコン】をいち早く載せたのは、『三国』でした。『三国』のすぐいところは、生きた言葉で勝負するところですよ。みずから「生きのよい現代国語辞典」と称し、【ピン芸人】【デトックス】【ゲリラ豪雨】なども積極的に収録しています。最近よく耳にするが、実は意味がはっきりとはわからない、だったら採用しようというのが『三国』の姿勢です。

どこよりも早く【ファミコン】を収録したのが『三国』なら、どこよりも早く収録しなくなったのも『三国』(笑)。そういう辞書です。

これとは逆に、「言葉が死語となつてから収録する」という姿勢が鮮明なのが、岩波書店の『岩波国語辞